過ちの色

大島　行雲

真っ暗だ。

前にも後ろにも車はない。見えない。ヘッドライトに照らし出されるのは、路上のセンターラインだけ。それも前方で暗闇に霞んで消えていく。

イライラする。

何が？

何もかもだ。

あいつの顔が浮かぶ。眉間に縦皺を寄せて、オレをなじる顔。手にしてた箸を投げつけ、マグカップまで投げてきやがった。オレがプレゼントした、スヌーピーのマグカップ。

いくらなんだって、あそこまでするか？　そりゃあ、オレが悪いのは分かってる。いい事したなんて思っちゃいない。でも、しょうがないだろ。気になって気になって、どうしようもなかったんだ。そんな事しない方が、って思ったけど。

携帯電話の履歴を盗み見た。後ろめたさは感じた。でも、それを上回るくらい不安で、不安を拭い去りたかったんだ。信じなくちゃいけない。それが恋人ってもんだ。そうも思う。でも、信じきれない。オレは最低だ。だからこそ、不安になる。

今夜は曇り空。ますます気分が滅入る。まあ、晴れてて星が目一杯見えたからって、それで今の気分が解消されるとも思えないけど。月も見えず、光ってるのは車のライトだけ。

オレはあいつが好きだ。あんないい女はいない。だから、不安なんだ。どうでもいい女なら、喧嘩しようが別れようが知ったこっちゃない。でも、あいつは違う。他のヤツらも狙ってた。最初はオレのことなんか眼中になかったに違いない。嫌われちゃなかったけど、オレを「男」としては見てなかった。それを、ようやくここまでこぎつけたんだ。いまだにオレのどこが良くて、あいつはオレと付き合ってるのか分からない。いい男なら、他にいくらだっている。イケメンのヤツ、背の高いヤツ、スポーツ万能のヤツ、芸人みたいに話の面白いヤツ。だから、不安なんだ。なのに、あいつは平気で他の男と楽しそうに笑う。そんなの当たり前だって、頭じゃ分かってる。オレだってあいつ以外の女と飯を食いに行ったりする。それでも、オレは他の男と楽しそうにしてるあいつを見ると不安になる。オレと他の女との付き合いと、それは違うんだ。オレはもてないけど、あいつは違う。その上、あいつが他の男に手を握られて平然としてたりしたら、不安にもなる。やたら携帯でメールをしてて、その相手がオレじゃないとなりゃ、気になって当然だ。

クソッ！　だからって、悪いのは分かってる。

震える手で、あいつの黄緑色の携帯のボタンを押してた時、あいつが戻ってきて。

チクショー、最悪だ。オレが悪いんだ。いつだって、オレが悪いんだ。だから、イヤなんだ。やっと念願の教師になっても、生徒にコケにされてばっかりだ。どうやって自信なんか持てる？　誰が見たって、オレとあいつは釣り合わない。あいつを褒めるヤツは山ほどいるけど、オレを褒めるヤツなんていやしない。

そう。悪いのはオレだ。分かってるんだ。自分でも、それがイヤで何とかしたいって思ってる。思ってたって、できないものはできない。酒や煙草をやめられないなんてレベルじゃない。麻薬みたいなもんで、自分じゃどうしようもないんだ。オレがどうしようもないバカだからって、いまさら、どうやって賢くなれる。いい男になれるってんだ。

なのに、あいつはオレを呼び出して相談してくる。

「また告白されたんだけど、どうしよう？」

どうしよう？　どうしようもねぇだろ。しかも、「また」だ。オレが喜んで、「じゃあ、付き合えば」って言うとでも思ってんのか？　オレが自信持って「そんなのさっさと断れよ」って言えるか？　そりゃ、ドラマとかじゃ、そう言ってほしくって聞いたりするのもあるけど、好きな女が、もしかしたらオレなんかよりふさわしい男がいるかもしれないって時に、まして、そんな迷ってるみたいな聞き方されて、自分勝手に「断れ」なんて言えるかよ。結局、どっちも言えやしない。どっちを言っても、オレはろくなヤツじゃねぇ。だから、迷ったんだ。何も言えなかったんだ。でも、何か言わなきゃって思って、時間ばっかり経って、気になってしょうがなくて、思わず喫茶店であいつの後ろの窓を見つめて、人差し指でテーブル叩いて腕時計なんか見ちまった。飽きてたんじゃない。どうしていいか分からなかったんだ。そういう時のクセみたいなもんなんだ。やった途端に「しまった」って自分でも思ったよ。謝ろうかと思ったけど。あいつも何も言わなかったから、オレも何も言わなかった。

それっきり。それでも、ずっとあの時のことは気になってた。でも、何日も経ってから、今更、そんなこと口に出せない。

それを、携帯の件で喧嘩になったさっき、あいつが急に持ち出した。そんなの、その時、言えよ。それをまるでオレが最低の人非人みたいに言いやがって。ずっと気になってたんだ。

ふと、何かが目の前を横切った。

鈍い衝撃に車体が浮き上がる。咄嗟に急ブレーキを踏む。体が前にのめり、シートベルトが胸に食い込んだ。金切り声の様に耳障りな高いブレーキ音が鼓膜を突き刺し、車体が僅かに横に振れ、漸く車は停まった。

真っ暗だ。音もしない。

静けさが体にじわじわ押し寄せてくる。頭が吹き飛ばされたみたいに思考が停止した。鼓動が急激に速まる。

何か、轢いた。猫じゃない。もっと大きな。

人影。

バックミラーを見る。夜の道に何か横たわってた。

自分が唾を呑み込む音が、やけに大きく聞こえた。震える手でドアの窓を開け、後ろを覗く。やっぱり横たわってる。上には信号機。

赤だ。

クソッ！

なんで、こんな田舎の一本道に信号なんてあるんだ。それも、こんな真夜中に歩いてるヤツがいるなんて。すぐ降りて、様子を見に行かないと。救急車を呼んで。それは分かってるのに、足が竦んで動かない。全然、気付かなかった。考え事ばかりしてて、前なんて見てなかった。ずっと同じ暗い道で、まっすぐ走るだけだと思ってた。オレのせいだ。また、全部悪いのはオレだ。折角、教師になったばっかりだってのに、交通事故だ。人身事故だ。注意不足の信号無視で。もう死んでるかもしれない。そうじゃなくても、まともにぶつかってるんだから、軽い怪我じゃすまない。オレは捕まっちまう。交通事故で人を殺しちまったら、当然、教師なんか続けられない。無職だ。あいつはオレから離れてくに違いない。

静かだ。何の音も聞こえない。気配もない。ハンドルを握ったままの手がじっとりと汗ばむ。震える唇を、ぎゅっと噛み締める。心臓は早鐘の様に打ち続き、胃が絞め殺されそうな感じだ。血の気が引いてるのに頭だけ熱くて、思いがあちらこちらへ揺れ動く。体は動かない。ただ頻りに何度も、神経症気味に、バックミラーに映った横たわる人影を見る。微動だにしない。

死んでる？

目撃者はいない。こんな田舎の道で真夜中だ。何の物音もしないし、民家の明かりもない。周りは畑ばかり。少し先に竹林みたいな鬱蒼とした藪が見えるくらいだ。走ってる車は一台もない。さっきから一台も。一台も？　本当に？　もしかしたら気付かなかっただけで、いたのかも。人にも信号にも気付かなかったみたいに、本当は走ってたかも。いや、そんな事はない。誰も見てない。オレが人を轢いたのを誰も見てない。当の被害者は動かない。死んでないにしても意識はない筈だ。オレの車がどんな車かなんて見てない。分からない。

このまま逃げちまえば。誰にも分からない。黙ってれば分からない。オレは、いつだって安全運転だった。誰も疑わない。仕事だって真面目にしてきた。目立った事はないけど、いつだって真面目にやってきた。こんな事で足を掬われてたまるか。オレが悪いんじゃない。こんな真夜中に左右も見ないで道を渡るヤツが悪いんだ。いや、悪いのはオレだ。信号は赤だった。つまり、横断したヤツは青だから渡ったんだ。

クソ！　どうする？　降りるか？　このまま逃げるか？

逃げりゃいいんだ。どうせもう死んでる。オレが何をしたって変わらない。それよりオレの将来の方が大事だ。死んじまったヤツなんて気にしてどうする？　逃げるんだ。早く。いつまでもぐずぐずしてたら、そのうち他の車が走ってきちまうかも。さっさとここからいなくならないと。アクセルを踏むんだ！

バックミラーを見た。さっきから全く変わらない場所に全く変わらない形で横たわってる。死んでる。絶対に死んでる。オレは人殺しだ。さっさと逃げるんだ。オレの人生がメチャメチャになる。これまで築いてきた信用も台無しだ。もう二度とあいつにも相手にしてもらえない。本当に別れる事になる。アクセルの上に置いた右足に力を入れようとした。

クソッ！

足を離し、ドアを開けた。

確かめるだけだ。生きてるか死んでるか、確かめるだけだ。死んでたら逃げよう。そうすればいい。生きてたら‥‥

いや、このままもう一度、車に乗って走り去った方が。

車を降り、近づいていく。そんなに大きくない。小柄だ。子供？　よりにもよって、子供を轢いたのか？　こんな時間に子供が夜道を歩いてたってのか？　血は流れてないみたいだ。

恐る恐る近づいていく。助けるにしても逃げるにしても早くしないといけない。それは分かってるのに走れない。足に力が入らない。ガクガクする。息苦しい。

見えた。

人間じゃない？　怖々、横にしゃがんで覗き見た。何か像みたいだ。手を触れてみる。硬い木の感触。絶対に人じゃない。力を入れて動かしてみる。ゴロンという鈍い音と共に木像の顔が見えた。地蔵だか観音だか道祖神だか、何かそんなものみたいだ。風雨で削られたのか目鼻立ちは分からなくなってる。

「‥‥ぇ？‥‥‥」

確かに横切った。オレの車の前を。道端に立ってるものにぶつかったんじゃない。なのに、何なんだ？

夜道の真ん中に倒れた木像は消えかかった顔で沈黙のまま、オレを見つめている。何故か微笑んでいる様に見えた。

オレは車から降りて来たけど、もしも降りずに逃げてたら、どうなったろう。木像を轢いたって大した罪にもならない。捕まる事もまずない。でも、逃げたら、木像を轢いたなんて分からなかった。人を轢き殺したと思ってた。

不注意で轢くのは過ちだ。

でも、もっと罪深い過ちがある。

オレはポケットから携帯電話を取り出した。もう寝ちまってる。それでもメールじゃなくて、自分の肉声で伝えたかった。数回のコール音の後、聞き慣れた声が出た。起きてた。

「あ‥‥オレ、‥‥‥‥さっきは‥‥‥ごめん」